

少女Aの帰還

(しようじよえーのきかん)

作・江野澤 雄一

《人物》

少女A

姉

妹

男

女

職員(男)

女4人／男2人／計6人

『① 原っぱ』

男と女が登場する。

男は車いすに座っている。

女は車いすを押している。

男 あっ……。眩しいな。

女 ピクニック日和でしょ。

男 ここはどこだ。

女 あなたが来たがっていた原っぱよ。(車いすを止める) 山並みがあんなにはっきりと見えるでしょ。

男 俺がいつ来たがったんだ。・・・ピクニック？

女 連れて行けて言ったわよ。

男 ……また寝ていたんだな。

女 あなたが突然眠ってしまったのはこれで何度目かしら。健診が終わって食堂でコーヒーを飲んでいたら突然眠ってしまったのよ。

男 こぼさなかったか。服にこぼしたらシミになるじゃないか。

女 自分のことを心配したら。・・・あなたは私の目をじっと見つめて言ったの。原っぱに行こう。ピクニックをしよう。

男 ……覚えてないよ。

女 私はどう答えていいかわからなくて黙っていたわ。あなたにそんなことを言われるなんて夢にも思ってもいなかったから。・・・あなたと一緒に病院に行くことだって初めてのことなのよ。それが一緒に原っぱに行こうなんて……。私がどれくらい驚いたかあなたにはわかるかな。すごく嬉しかったんだから。

男 どうして連れてきたんだ。・・・夢遊病状態なんだろ。

女 私になにも言わないでいると今度は強い口調で言うの。原っぱに行こう、ピクニックをしよう。

男 無視すればいいだろ。

女 あれは命令だったわ。・・・有無を言わせない感じで悪くはなかった。

男 俺が言ったのか？

女 これはあなたの話なんだからそうに決まっていますでしょうが！・・・いろいろ引っ張って見たんだけど全然起きなかった。私の顔をまっすぐに見ているの。別の存在に体に乗っ取られてしまったみたいだった。・・・あなたが正気に戻るかと思っただけで原っぱに来たのよ。正解だったでしょ？

男 どこを引っ張ったんだ。

女 フフフ・・・痛かった？

男 痛かったら起きる。

女 突然眠ってしまうときには痛みを感じないのかも。夜寝ているときに引っ張って調べてみるね・・・いい加減に先生に見てもらいな。夢遊病の人が殺人を犯すこともあるのよ。いくらあなたのことを好きでも殺されるのは嫌だからね・・・夢遊病状態と無重力状態って似ているわ・・・あ、蝶。

男 どこ？

女 そこ。

男 ・・・あれは蛾だよ。

女 蝶だって。

男 あんな蝶いないだろ。

女 じゃあ、いいよ蛾で・・・この森から子供たちが消えたのね。イメージしていたのとはなんか違う。

男 どんな想像をしていたんだ。

女 もっと陰気な感じ・・・やっぱ蝶だ。

男 お前なあ。

女 普通の原っぱなのね。記念碑とかあると思っていただけでもない。

男 あれが監視小屋だよ。

女 ふーん・・・今夜泊まってもいい？

男 ・・・なんで。

女 え・・・嫌？

男 そのつもりだったんだから嫌じゃないよ。俺たちはいまそんな話をしていないだろ。

女 言っておくのを忘れていたから。

男 いま言わなくてもいいじゃないか・・・見られているよ。

女 誰に？

男 監視人と呼ばれている係の人がいるんだよ。

女 私たちなんにもしてないのにおかしいじゃない。

男 監視しなくちゃいけないんだからおかしくないよ。

女 なんのために？

男 念のために決まっているだろ。

女 17年も同じ人がずっと見ているの？

男 今は3人目の監視人だよ。本当は市役所の住民相談課の職員なんだ。

女 左遷されたの？

男 交代するときにはちゃんと市の広報誌に載るんだからきちんとした役職だよ・・・失礼だな。

女 私いますごく楽しいわ。

男・・・なんで？
女ピクニック。
男これのどろがピクニックなんだ。
女あなたが言ったのよ。
男寝言なんだろ。
女私は楽しいんだからいいじゃない・・・人に見られながらのピクニックなんて初めて。今度はお弁当を持ってきましょうよ。私がお弁当を作ってあなたが食べるのね。梅干しと鮭のおにぎり。卵焼き、ハンバーグ、タコのウインナー、ポテトサラダ、コーンスープ。潜在意識のなかで私と原っぱでピクニックをしたかったのよ。素直になりなさい。
男普段の俺が素直じゃないみたいじゃないか・・・俺だけしか食べてないけど自分は食べれないの？
女私は見ているだけでいい。
男なんだよそれ。
女こういう会話好きよ。あなたは？
男・・・どうかな。
女そんな言葉を聞きたいわけじゃない。
男・・・怒ってるの？
女どうして。
男だって。
女・・・告白されるのかと思ったのよ。
男・・・ん？
女そう思うシチュエーションじゃない。
男待てよ。
女そうよ。私は待っていた。
男待てて。
女だから待っているんだって・・・やめた。
男・・・ごめん。
女謝らないで。
男うん・・・あそこ。
女どこ。
男監視人が来た。
女頼りなさそうな人ね。やっぱり左遷されたんじゃない。
男人を見かけで判断するな。

職員が登場する。

職員 こんにちは。

男 こんにちは。

女 こんにちは。

職員 初めまして。

女 どうも初めまして。

男 見回りですか。

職員 あなた方が歩いているのを小屋から見たんです。ご挨拶をと思ひまして。

女 ずっと監視をされているなんて大変ですね。

職員 申し訳ございません。(礼) ご不快の念をおかけいたしまして大変申し訳なく思

います。謹んでお詫びいたします。(礼)

女・・・そんなことはないです。

職員 職務とはいえ勝手に見ていたわけですからお怒りご最もです。(礼)

女 気を悪くなんかしていませんよ。

職員 本当になんとお詫び申し上げたらよいのか。(礼)

女 全然気にしていませんから。かえって気になりますから。

男・・・あの、彼女はこの街の出身じゃないんです。

女 この原っぱには初めて来たんです。

職員 そうですか。

女 なにもないんですね。

職員 そうですね。ほら、頂が崩れた山が見えるでしょう。あの山が(くしゃみ)噴火

したときに流れた溶岩流の跡地に誕生したのがこの森です。地面には風穴と呼ばれる穴が空いています。(くしゃみを連発する)

女 大丈夫ですか？

職員 鼻炎なんです。

女 風邪じゃないですか。

職員 慢性鼻炎で一年中これです。

女 マスクをすればいいじゃないですか。

職員 マスクは暑いから嫌いなんです・・・それに私の顔はマスクが似合わないんです。想像してみてください。(口元を手で隠す)

女・・・それは大変ですね。

職員 市民の皆様には奉仕をするためなら鼻炎くらいどうということはないです。(くしゃみ)この森は泣くんですよ。風が強い日は山から吹き下ろす風が風穴を通り抜けていく音がするんです・・・この野原一面に仮設住宅が建っていたなんてことも、

子供たちが森の奥へと連れ去られたこともなにもかもが夢みたいです。

女 あなたはずっとこの街に？

職員 そうです。当時の住民もだいぶ減ってこの街も変わりました。街の復興を成し遂げようと頑張っていた矢先にあの事件ですから。あの事件を契機に引越す人がたくさんいたんです。

女 いまは住みやすい街になりましたね。

職員 見た目には穏やかですけどこの街の複雑さは見ただけじゃわからないんです。

女 お一人で寂しくないですか。

職員 仕事ですから。・・・ただ、昔のことは思い出しますね。私の家は川沿いであって流されたのでこの原っぱに避難しました。この街を流れる河は昔から氾濫するんです。太平洋戦争の直前に最新の治水技術を用いてダムが造られました。軍需工場が密集する工業地帯に送る電気を作っていたんです。・・・歴史は苦手ですか？

女 そんなに好きでは・・・。

職員 大型の台風が襲来すると聞いてもみんな安心していたんです。ダムが街を守ってくれると・・・。あれ、寝てますか？

女 最近はずぐに寝てしまうんです。

職員 はあ。・・・失礼ですがお付きあいをされているんですか？

女 ・・・。

職員 すみません。・・・余計なことばかり言ってしまうんです。

女 付きあっていますよ。

職員 ・・・はあ。

女 この原っぱを通過して森のなかに子供たちが去って行ったんですね。

職員 4歳から17歳までの子供たちが風穴を通過してどこかに消えてしまった。・・・童話が現実になった事件だとマスコミが押しかけたんです。台風で大変なところでショッキングな事件が続いたわけですからね。

女 この人はどうして街を出て行かなかったんでしょうね。

職員 聞いてみたことはないんですか。

女 ええ。

職員 そうですか。・・・私は巡回がありますのでこれで失礼します。

女 聞いてもいいですか。

職員 はい。

女 子供たちは帰ってくると思いますか。

職員 ・・・わからないです。

女 見守っているのは子供たちが帰ってくるかと考えているからじゃないんですか。

職員 さあ。

女 ・・・え。

職員 私は仕事ですから。

女 だって。

職員 最初はみんな希望を持っていたんです。森を探して見つからなければ山を探せばいい。必ず見つかるって……。だけど子供たちは見つからなかったんです。

女 この人は見つかったじゃないですか。

職員 濁流で流された友達がいます。倒壊した自宅で泥だらけになって発見された友人の死体を私は見ました……。消えた子供たちのことを台風で死んだ子供たちの死と同じように悲しんでいいのかわからないんです。

女 この人はなにもしていませんよ。行列について行って置き去りにされただけじゃないですか……。たった一人で。

職員 僕についていきませんでした。当時、彼は17歳で僕は16歳です。僕についていかなかったです。

女 ……笛を吹くだけの男にどうしてみんなついて行ってしまったんです。ただ笛を吹くだけの男になんて。

職員 違います。実際に笛を吹いていたわけじゃありません。

女 ……だって。

職員 ハーメルンの笛吹きにそっくりだからマスコミがああ男のことをそう呼んだだけですよ。

女 笛は吹いていないんですか。

職員 そうです。

女 ……笛を吹かなかったのにどうして子供たちはついて行ったんですか。

職員 笛なんか吹いたって子供たちはついて行きませんよ。(くしやみ) 見回りがありませんのでこれで失礼します。(握手) お会いできて嬉しかったです。さよなら。

女 さよなら……。それじゃあ。

職員は去る。

男 ……おい。

女 また寝ていた……。あの人、行っちゃったよ。

男 曇っているか。

女 晴れているじゃない。

男 暗い。地下にいるみたいだ。

女 ……なに？

男 雷が鳴っている……。光った。

女 ねえ……。大丈夫？

男 ゴロゴロ聞こえる。

女 救急車っぽうか。

男 ここは圏外だ。

女 病院に戻る？

男・・・わからない。

女 どうしたらいい？

男 動かさないでくれ・・・。

女 さっきの人を呼んでよようか。

男 どうして？

女 どうしてって・・・。助けてもらうのよ。公務員なんだから。(大声で) おーい、

おーい！・・・駄目だ。呼んでも来ない。公務員のくせに。

男 この音は森から聞こえてくる。森にはなにがあるんだ？・・・子供たちの骨がゴロ

ゴロしているんじゃないかな。ゴロゴロゴロゴロ・・・違う。これは雷の音じゃ

ない。子供たちの頭の骨がゴロゴロゴロゴロ、風に吹かれて転がっているんだ。

女 音なんて聞こえない・・・なんなのよ。

男 聞こえるんだ。

女・・・私、監視小屋に行つて電話を貸してもらおう。電話くらいあるでしょ・・・

待っていられる？

男 大丈夫。ここで待っているから。

女 すぐに戻るから・・・行つてくるね。

女は去る。

取り残される男。

少女Aが登場する。手には傘を持っている。

少女A こんにちは。・・・どうされました。

男 こんにちは。・・・ちよつと具合が悪いんです。

少女A 大丈夫ですか。

男 急に目が見えなくなつたんです。それに耳鳴りも・・・。雨が降る前みたいに空が

曇っていて。

少女A ここでなにをされているんですか。

男・・・ピクニックです。

少女A まあ・・・。お好きなんですか？

男 いえ。そうでいうわけでは・・・。その市民病院に行つた帰りなんです。連れが

人を呼びに行つたんですが僕は動けないからこうして待っているんです・・・。

少女A 苦しいですか。

男 少しか。

少女A そうですか・・・。私はいま傘を持っています。

男・・・ん。

少女A これは傘です。

男・・・それがなにか。

少女A この傘は昔、雨が降ったときに使ったものです。これから雨が降るから持つて
いるわけじゃありません。もうずいぶんと長い間使っています。

男・・・はあ。

少女A 私がこの傘を使ったのはもうずっと以前のことです。もしも具合がよくなると
したら私の言うことを信じられますか。

男 あなたを信じる・・・？

少女A 私を信じて欲しいんです。

男 あなたはお医者さんですか？

少女A 違います。そうじゃありません・・・例えば、ここに傘があります。この傘
で人を救うことができるかとあなたは思いますか？

男・・・どうやって救うんです？

少女A 強く思うんです。この傘で人が救えると強く思うことが大切です。無理だと思
っても諦めないで、周りからなんとと言われてもとにかく思い続ける・・・それが信
じることです。

男 僕にはわかりません。あなたの言っていることの意味が半分もわからない・・・。

(急に夢から醒めたように) あっ。眩しいな・・・誰ですかあなたは？

少女A 具合が悪いのは直りましたか。

男・・・また寝ていた？

少女A あなたは寝ていたんですね。

男・・・はい。病気なんです。

少女A 喋っていましたよ。

男 夢遊病なんです。

少女A 夢遊病・・・。大人になってしまったからですか。

男・・・はい？

少女A そうなんですか。

男 さあ・・・。

少女A たった今のことを忘れてしまったんですか。

男 すみません。

少女A それではもう覚えていないでしょうね。

男 なにをですか？

少女A この森の奥でお会いしたことを。

男・・・人違いです。

少女A (空を見上げる) 本当に降りそうですね。

男 なんですか・・・ああ、そうか耳鳴りがしたんだ。目の前が暗くて・・・。そこ

にあなたが現れて傘を……。夢じゃなかったのか。

少女A この傘を差しあげます。

男 ……いえ、そんな。

少女A 私にはもう必要のないものですから。

男 そうですか……。でも。

少女A どうぞ。

男 (受け取ってしまう) どうもありがとうございます。

少女A どういたしまして。ところで道をお尋ねしてもよろしいですか。

男 どうぞ。

少女A 市営第二団地を探しているんです。

兄 反対方向ですよ。

少女A よく道に迷うんです。案内役がいないとちゃんと歩けなくて……。久しぶりに帰ってきたんです。

男 里帰りですか？

少女A ……小さい頃、原っぱにピクニックに来ました。両親は私たち姉妹を森には入らせてくれなかったんです。

男 森は深くて一度迷うとなかなか外に出られないんです。この辺の親は子供に、悪いことをすると森に食べられると言って叱るんです。それがとても怖いんですよ……。子供たちはこの森に入ったまま街には戻ってこなかった。警察が大規模な捜索をしました。結局見つかりませんでした。それ以来、この森に入る人間はいません。子供を探しに行った大人たちは街に帰ってこなかった……。

少女A ここでピクニックをするのは森に惹かれているからですか。それともあなた自身を連れ去って欲しいからですか。

男 ……ちよつと聞いてもいいですか。

少女A はい。

男 あなたはどこから来たんですか。

少女A 街はこれから私の噂で賑やかになるでしょう……。私は帰ってきたんです。

男 ……あなたは誰なんですか。

少女A 名前はありません……。どこかに置いてきてしまったんです。いまの私は名無しです。

男 名前がなければなんと呼べばいいんですか。

少女A 少女A……。この原っぱでした。私が連れ去られたのは。

男 ……帰ってきたんですね。

少女A 帰ってきたんです。

暗転。